



有島武郎集

日本文学全集 22



日本文学全集 22 有島武郎集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 有島武郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

有島武郎集 目次

或る女

An Incident

カインの末裔

小さき者へ

生れ出づる悩み

ロダン先生の事

惜みなく愛は奪ふ

武者小路兄へ

宣言一つ

革命心理の前に横はる二岐路

五

三〇七

三二三

三四二

三五〇

三五四

三九六

四六三

四六七

四七二

農場解放顛末

年譜

人と文学

本多秋五

四六五

四六

四三

有島武郎集

道を行く葉をたもと心もと
荒野の上に海は是も並け森

或る女

どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。二人がてん／＼に切符を出さうとする時、「若奥様、これをお忘れになりました」と云ひながら、羽被の紺の香の高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ、慌てたやうに追ひ駈けて来て、オリ／＼色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く／＼、早くしないと出つちまひますよ」改札が堪らなくなつて癩癩声をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみ／＼怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神経はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ気味であつた歩みをびつたり止めてしまつて、落ち付いた顔で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦労よ。家に帰つたらね、今日は帰りが遅くなるかも知れませんが、お嬢さんたちだけで校友会にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから横浜の近江屋——西洋小間物屋の近江屋が来たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよと／＼と改札と葉子とをかたみがりにはりに見やりながら、自分が汽車にでも乗りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顔は段々険しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする／＼とその方に近づいて、

新橋を渡る時、発車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空気に包まれて聞こえて来た。葉子は平気でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駆けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする駅夫と争ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見成つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて済みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麦稈帽子を一寸脱いで、黙つたまゝ、青い切符を渡した。

「おや何故一等になさらなかつたの。さうしないとイケない訳があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに駅夫がせき立てるので、葉子は黙つたまゝ、青年とならんで小刻みな足

「どうも済みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顔付をしながら、それでもおめ／＼と切符に孔を入れた。

プラットフォームでは、駅員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く気付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べてしづ／＼と歩きながら、車夫の届けた包物の中には何があるか中ててみるゝとか、横浜のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれるとか云つて、音楽者のやうにデリケートなその指先きで、わざとらしく幾度か青年の手に触れる機会を求めた。列車の中からはある限りの顔が二人を見迎へ見送るので、青年が物憤れない処女のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポケットに突つ込んで、靴の爪先きで待ち遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に続いて飛び乗つた時には、機関車の応笛が前方で朝の賑やかなさゝめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを嵌めた入口の練戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうとして、八分通りつまつ

た両側の乗客に稲妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、瘦せた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顔からも脚からも消え失せて、葉子は悪びれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞台にでも現はれるやうに、軽い微笑を右の頬だけに浮べながら、古藤に続いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あてやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後毛をかき撫でる序に、地味に装つて来た黒の脂ぎつた商人体の男は、あたふたと立ち上つて自分の後ろのシェードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛白に書生下駄をつゝかけた青年に対して、素性が知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情を湛へたこの女性の対照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乗客一同の視線は綾をなして二人の上に乱れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な対照になつてゐるといふ感じを快く迎へてでもゐるやうに、青年に対して殊更親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ゑる眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐるかの瘦せた男だつた。男の名は木部孤節と云

つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰よりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰よりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに読み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は気がついてゐた。而して葉子に対する乗客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼は本氣に葉子を見詰め始めたのだ。葉子は予めこの刹那に対する態度を決めてゐたから慌ても騒ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい媚びの色を浮べながら、黙つたまゝで軽く點頭かうと、少し肩と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稲妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に応じて微笑みかはず様子のないと云ふ事だつた。實際男の一文字眉は深くひそんで、その両眼は一際鋭さを増して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかつかつとなつたが、笑みかまけた眸はそのまゝで、する／＼と男の顔を通り越して、左側の古藤の血気のいゝ頬のあたりに落ちた。古藤は練戸のガラス越しに、切割りの蛭を眺めてつくねんとしてゐた。「又何か考へていらつしやるのね」

葉子は瘦せた木部にこれ見よがしと云ふ物腰で華やかに云つた。

古藤はあまりはずんだ葉子の声にひかされて、まんじりとその顔を見守つた。その青年の単純な明らさまな心に、自分の笑顔の奥の苦い渋い色が見抜かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた蛭の色が、余り綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がかつて来たんですよ」

青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本当にね」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。瘦せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正面に向き直ると共に、その男の眸の下で、悒鬱な険しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

—

葉子は木部が魂を打ちこんだ初恋の的だつた。それは丁度日清戦争が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戦争に関係のあつた事柄や人物やに事実以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、或る大新聞社の従軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心力のゆらいた文章を発表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覚者として、基督教婦人同盟の副会長をしてゐた葉子の母は、木部の属してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、或る日その社の従軍記者を自宅に招いて慰勞の會食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の声の悲壯な、

感情の熱烈なこの少壮従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女学生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、厳格で通つてゐる米国人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。上野の音楽学校に這入つてヴァイオリンの稽古を始めてから二ヶ月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケール博士一人は洩い顔をした。而して或る日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ学校を退学してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社会では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隠れた弱点を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には総ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一歩といふ所で突つ放した。恋の始めにはいつでも女

性が祭り上げられてゐて、或る機会を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に対しても、自分との關係の絶頂が何処にあるかを見ぬいてゐて、そこに来かゝると情容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと、彼等は一人として葉子に対して怨恨を抱いたり、憤怒を漏したりするのはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相当にませた女と見る方が勝手だつたから。

それは恋によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないやうな風をして集まつて来た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな華奢な可憐な姿をした葉子が、慎しみの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケール博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたゞ一目でこの美しい才気の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な悪戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の緻麗な割合に下顎骨の発達

した——まで何処か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑発せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を焼くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。

苟も文学を解するものは木部を知らないものはなかつた。人々は木部が成熟した思想を掲げて世の中に出て来る時の華々しさを噂し合つた。殊に日清戦役といふ、その当時の日本にしては絶大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄の一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何処か大望に燃え立つたやうなこの青年の活気は、家中の人々の心を捕へないでは置かなかつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有為多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせゝら笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る／＼抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは恋といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かう云ふ場合葉子がどれ程恋の場面を技巧化し芸術化するに

巧みであつたかは云ふに及ばない。木部は寝ても起きても夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで、熱心な信者で、清教徒風の誇りを唯一の立場としてゐた木部がこの初恋に於てどれ程真剣になつてゐたかは想像する事が出来る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に焼かれようとする自分を見出す事が屢々だつた。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して予てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないといふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落ち付き払つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な譏計は、年若い二人の急所をそろ／＼と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。それを払ひかねて木部が命限りに藻掻くのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無条件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の罪に他愛もなく酔ひ始めた。葉子はこの眼もくらむやうな晴れ／＼しいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懐柔策も、何んの甲斐もなく、冷静な思慮深い作戰計画を根氣

よく続けられ続ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健気けんけいにもか弱い女の手一つで戦つた。而して木部の全身全霊を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折つた。而して五ヶ月の恐ろしい試練の後に、両親の立ち会はない小さな結婚の式が、秋の或る午後、木部の下宿の一間で執り行はれた。而して母に対する勝利の分捕品ぶんとらひとして、木部は葉子一人のものとなつた。

木部はすぐ葉山に小さな隠れ家の様な家を見付け出して、二人は睦まじくそこに移り住む事になつた。葉子の恋は然しながらそろ／＼と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競争すべからぬ関係の競争者に対して見事に勝利を得てしまつた。日清戦争といふものの光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。それ等はそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものの裏を返して見た事だつた。葉子を確実に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱点を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な気の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせず朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事欠きながら、万事を葉子の肩になげかけてそれが当然な事でもゐるやうな鈍感なお坊ちゃん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神経をいら／＼させ出した。始めの中は葉子も

それを木部の詩人らしい無邪気さからだと思つて見た。而してせつせ／＼と世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも統かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼であつたのに、思ひもかけぬ食禁な陋劣な情慾の持主で、而かもその欲求を貧弱な体質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも気が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感じずにはゐられなかつた。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいら／＼しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に対する愛情が募れば募る程、葉子は一生が暗くなりまさるやうに思つた。かうして死ぬために生れて来たのではない筈だ。さう葉子はくさ／＼しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一挙一動を注意するやうになつて来た。同棲してから半ヶ月もたない中に、木部はやゝもすると高圧的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り抜きながら、鈍つてゐた葉子の批判力は又磨きをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと思ふと、葉子の自尊心は思ふ存分に傷けられた。

外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二ヶ月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、所謂物事によく解る高山といふ医者いしやくの病室に閉ぢ籠らしてゐらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましく男の爲めに眼のくらんだ自分の不覚を泣き悔んだ。木部が狂気のやうになつて、やうやく葉子の隠れ場所をみつめて会ひに来た時は、葉子は冷静な態度でしら／＼しく面会した。而して「あなたあなたの将来のお爲めに屹度いどなりませんか」と何気なげに云つて退けた。木部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出しかねてゐるのを見ると、葉子は白く揃つた美しい齒を見せて声を出して笑つた。

葉子と木部との間柄はこんな他愛もない場面を区切りにしてはかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、総ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も触れた事のない処女のそののやうにさへ見えた。それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、固よりその事を木部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後、母にその告白を信じさす程の生活を敢てしてゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき悪意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ、祖母の膝には一度も乗らなかつた。意地の弱い葉子の父だけ

は孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母うちのぼとの家に引き取るやうにしてやつた。而してそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歳の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文学に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雑誌の発行も企てた。而してその総てに一々不満を感ずるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つてする仕事もなく、胸の中だけには色々な空想を浮べたり消したりして、兎角回想に耽り易い日送りをしてゐる時だつた。

三

その木部の眼は執念しつげんくもつきまづはつた。然し葉子はそつちを見向かうともしなかつた。而して二等の切符でもかまはないから何故一等に乗りなかつたのだらう。かう云ふ事が屹度あると思つたからこそ、乗り込む時ときもさう云はうとしたのだのに、気が利かないつちやないと思ふと、近頃になく起きぬけから冴え／＼してゐた気分が、沈みかけた秋の日のやうに陰つたり滅入つたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたやうに脳の透間すうかんといふ透間をかたく閉ざした。たまらなくなつて向ひの窓から景色でも見よ

うとすると、そこにはシェードが下ろしてあつて、例の四十三四の男が厚い唇をゆるく開けたまゝで、馬鹿な顔をしてながらまじく葉子を見やつてゐた。葉子はむづつとしてその男の額から鼻にかけてあたりを、遠慮もなく発矢と眼で鞭つた。商人は、本当に鞭たれた人が泣き出す前にするやうに、笑ふやうな、はにかんだやうな、不思議な顔のゆがめ方をして、さすがに顔を背けてしまつた。その意気地のない様子がまた葉子の心をいら／＼させた。右に眼を移せば三四人先きに木部がゐた。その鋭い小さな眼は依然として葉子を見守つてゐた。葉子は震へを覚えるばかりに激昂した神経を両手に集めて、その両手を握り合せて膝の上のハンケチの包みを押へながら、下駄の先きをぢつと見入つてしまつた。今は車内の人が申し合せて侮辱でもしてゐるやうに葉子には思へた。古藤が隣座にゐるのさへ、一種の苦痛だつた。その瞑想的な無邪気な態度が、葉子の内部的経験や苦悶と少しも縁が続いてゐないで、二人の間には金輪際理解が成り立ち得ないと思ふと、彼女は特別に毛色の變つた自分の境界に、そつと窺ひ寄らうとする探偵をこの青年に見出すやうに思つて、その五分刈りにした地蔵頭までが顧みるにも足りない木の屑か何んぞのやうに見えた。瘦せた木部の小さい輝いた眼は、依然として葉子を見詰めてゐた。

何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだらう。彼は今でも自分を女とあなどつてゐる。小ぼけな才力を今でも頼

んでゐる。女よりも浅ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立ち入らうとしてゐる。あの自信のない臆病な男に自分はさつき姫を見せようとしたのだ。而して彼は自分がこれ程まで誇りを捨てて与へようとした特別の好意を眦を反へして退けたのだ。

瘦せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめてゐた。この時突然けた／＼ましい笑ひ声が、何か熱心に話し合つてゐた二人の中年の紳士の口から起つた。その笑ひ声と葉子と何んの関係もない事は葉子にも分り切つてゐた。然し彼女はそれを聞くと、もう慾にも我慢がし切れなくなつた。而して右の手を深々と帯の間にさし込んだまゝ立ち上りざま、

「汽車に酔つたんでせうかしらん、頭痛がするの」と捨てゝるやうに古藤に云ひ残して、いきなり緩戸を開けてデッキに出た。

大分高くなつた日の光がばつと大森田圃に照り渡つて、海が笑ひながら光るのが、並木の向うに広過ぎる位どきに眼に這入るので、軽い瞑眩をさへ覚える程だつた。鉄の手欄にすがつて振り向くと、古藤が続いて出て来たのを知つた。その顔には心配さうな驚きの色が明らかに現はれてゐた。

「ひどく痛むんですか」

「えゝ可なりひどく」

と答へたが面倒だと思つて、

「いゝから這入つてゐて下さい。大袈裟に見えるといやですから……大丈夫危なかりませんとも……」
と云ひ足した。古藤は強ひてとめようとはしなかつた。

而して、

「それぢや這入つてゐるが本当に危なう御座んすよ……用があつたら呼んで下さいよ」
とだけ云つて素直に這入つて行つた。

「Simpleton !」

葉子は心の中であうつぶやくと、焼き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄に臂をついたまゝ、放心して、晩夏の景色をつゝむ引き締つた空気に顔をなぶらした。木部の事も思はない。緑や藍や黄色の外、これと云つて輪廓のはつきりした自然の姿も眼に映らない。唯涼しい風が習々と髪びんの毛をそよがして通るのを快いと思つてゐた。汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯渾沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も幾度も左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引つ掻きまはすやうな激しい音を立てて、汽車は六郷川の鉄橋を渡り始めた。葉子は思はずぎよつとして夢からさめたやうに前を見ると、釣橋の鉄材が蛛手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子は思はずデッキのバンネルに身を退いて、両袖で顔を抑へて物を念じるやうにした。

さうやつて氣を静めようと眼をつぶつてゐる中に、睫を

通し袖を通して木部の顔と殊にその輝く小さな両眼とがまざまざと想像に浮び上つて来た。葉子の神経は磁石に吸ひ寄せられた砂鉄のやうに、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあつた時と同様な緊張した恐ろしい状態に返つた。停車場に近づいた汽車は段々と歩度をゆるめてゐた。田圃のこゝかしこに、俗悪な色で塗り立てた大きな広告看板が連ねて建ててあつた。葉子は袖を顔から放して、氣持の悪い幻像を払ひのけるやうに、一つ／＼その看板を見迎へ見送つてゐた。処々に火が燃えるやうにその看板は眼に映つて木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黒髪を下げた姫が経巻きんまきを持つてゐるのがあつた。その胸に書かれた「中将湯」といふ文字を、何気なしに一字づゝ読み下すと、彼女は突然私生児の定子の事を思ひ出した。而してその父なる木部の姿は、かゝる乱雑な聯想の中心となつて、又まざ／＼と焼きつくやうに現はれ出た。その現はれ出た木部の顔を、謂はば心の中の眼で見つめてゐる中に、段々とその鼻の下から髭が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な温みを持ち出して来た。汽車は徐々じゆぜんに進行をゆるめてゐた。稍なほく荒れ始めた三十男の皮膚の光沢は、神経的な青年の蒼白い膚の色となつて、黒く光つた軟かい頭の毛が際立つて白い額を撫でてゐる。それさへがはつきり見え始めた。列車は既に川崎停車場のプラットフォームに這入つて来た。葉子の頭の中では、汽車が止り切る前に仕事をし遂はげさねばならぬといふ風に、今見た

ばかりの木部の姿がどん／＼若やいで行つた。而して列車が動かなくなつた時、葉子はその人の傍にでもゐるやうに恍惚とした顔付で、思はず識らず左手を上げて——小指をやさしく折り曲げて——軟かい髪の後れ毛をかき上げてゐた。これは葉子が人の注意を牽かうとする時にはいつでもする姿態である。

この時、緩戸がけたましく開いたと思ふと、中から三人の乗客がどや／＼と現はれ出て来た。

而かもその最後から、涼しい色合のインパネスを羽織つた木部が続くのを感じて、葉子の心臓は思はずはつと処女の血を盛つたやうに時めいた。木部が葉子の前まで来てすれ／＼にその側を通り抜けようとした時、二人の眼はもう一度しみ／＼と出遇つた。木部の眼は好意を込めた微笑に浸されて、葉子の出やうによつては、直ぐにも物を云ひ出しさうに唇さへ震へてゐた。葉子も今まで続けてゐた回想の情力に引かされて、思はず微笑みかけたのであつたが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に与へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯葉のやうに、二人の間を空しくひらめいて消えてしまつた。葉子は木部のあわて方を見ると、車内で彼から受けた侮辱に可なり小気味よく酬い得たといふ誇りを感じて、胸の中がやゝすが／＼しくなつた。木部は瘦せたその右肩を癖のやうに怒らしながら、急ぎ足に濶歩して改札口の所に近づいたが、切符を懐中から出す

ために立ち止つた時、深い悲しみの色を眉の間に漲らしながら、振り返つてぢつと葉子の横顔に眼を注いだ。葉子はそれを知りながら固より侮蔑の一瞥をも与へなかつた。

木部が改札口を出て姿が隠れようとした時、今度は葉子の眼がぢつとその後姿を逐ひかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線はそこを離れようとはしなかつた。而してその眼には淋しく涙がたまつてゐた。

「又会ふ事があるだらうか」

葉子はそゞろに不思議な悲哀を覚えながら心の中でさう云つてゐたのだつた。

四

列車が川崎駅を発すると、葉子はまた手欄に倚りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。稍々色づいた田圃の先きに松並木が見えて、その間から低く海の光る、平凡な五十三次風な景色が、電柱で句読を打ちながら、空洞のやうな葉子の眼の前で閉ぢたり開いたりした。赤蜻蛉も飛びかはず時節で、その群れが、巖石から打ち出される火花のやうに、赤い印象を眼の底に残して乱れあつた。何時見ても新開地じみて見える神奈川を過ぎて、汽車が横濱の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉の松並木を黄色く見せる程に暑く照らしてゐた。

煤煙で真黒にすゝけた煉瓦壁の蔭に汽車が停ると、中から一番先きに出て来たのは、右手にかのオリ／＼色の包物